



静岡市文化財資料館の企画展



「弥次さん喜多さん 駿州の旅」のチラシ

1 「弥次さん喜多さん 駿州の旅」の企画展の紹介

今年（令和2年）10月31日から12月13日まで、静岡浅間神社内にある静岡市文化財資料館で「弥次さん喜多さん 駿州の旅」と称する企画展が、日本遺産認定記念として開かれています。

弥次さん喜多さんが登場するのは、駿府出身の十辺舎一九が執筆してベストセラーになった『東海道中膝栗毛』です。企画展として開催した目的は、「江戸時代の旅の楽しみや、当時の旅を追体験してもらえれば」ということにあるようです。実際、この滑稽本が庶民に与えた影響は大きく、日本初の「旅ブーム」を巻き起こしたと言えます。



十辺舎一九の生誕地



十辺舎一九の親族の眠る寺院

2 駿府出身の十辺舎一九の人物像

十辺舎一九は明和2年（1765）、駿府国府中（現在の静岡市葵区両替町1丁目）に駿府町奉行同心の子として生まれています。一九の墓は東京の東陽院にありますが、親族の墓は今でも顕光院（静岡市葵区研屋町）にあります。日本の職業作家の先駆けといわれ、出世作『膝栗毛』を皮切りに幅広い執筆をてがけ、『東海道中膝栗毛』はその最高傑作とされています。

武士の子として育ち、剣は神道無限流を学び、槍術にも秀でていたといわれます。20代の頃には駿府奉行所小田切土佐守直年に仕え、江戸や大阪に随行しています。その後役を辞し、大坂で近松余七の名で浄瑠璃作家になった後、再び江戸に向かい、出版業をしていた鳶屋重三郎の仕事を手伝ったのをきっかけに戯作の道に入っています。彼は作家として成功した後も、故郷駿府には度々帰っていて、一九の作品の中には駿府の人や町が登場しています。また、一九は画才にも秀でていて、江戸での最初

の仕事は、山東京伝の黄表紙の挿絵でありました。つまり、一九は文筆はもとより、挿絵、版下まで一人でやることができました。それだけに、コストが安くなり重宝がられたようです。



[旅ブームを起こした弥次さん喜多さん](#)

[巽櫓を背景に建つ弥次さん喜多さんの像](#)

3 『東海道中膝栗毛』に登場する弥次さん喜多さん

『東海道中膝栗毛』は、享和2年(1802)から文化11年(1814)が初版の滑稽本で、江戸後期のベストセラー。お調子者の弥次郎兵衛・喜多八の二人が、江戸から伊勢参りを経て京・大阪見物に向う旅先での事件の失敗談が、洒落や狂歌を交えて生き生き描かれています。執筆に当たり一九は詳しい調査を何度も行い、さまざまな書物から笑いの種を集めました。

「滑稽本」とは江戸時代後期に流行した戯作の一種で、江戸町人の生活を平易な会話文で面白おかしく描いたものであり、「膝栗毛(ひざくりげ)」とは栗毛の馬の代わりに自分の足(脚)で歩くことを意味します。

登場人物の弥次さんとは、神田八丁堀の長屋に住む中年男。元は駿府の裕福な商家生まれだが、生来の怠け者で遊蕩の挙句に身代を傾け、江戸へ夜逃げしました。そして、妻子と死別した男やもめ。色男を気取るが、道化顔の太った「唯の親仁」。喜多さんとは親子ほど年が離れています。喜多さんとは、江尻(現静岡市清水区)生まれ。元は鼻之助という名の旅役者で陰間(男色商売)上がりの若者。客だった弥次さんと江戸に夜逃げした。江戸の奉公先を追い出され、弥次さん宅に居候していました。背は低く、団栗眼に獅子鼻。女癖が悪く、すぐに先走るお調子者。旅当時の年齢は30歳くらいの設定。



[4-1 狂歌入東海道「東海道五拾三次 蒲原」](#)



[4-2 豎絵東海道「東海道五十三次 蒲原」](#)

4 旧東海道六宿(現在の静岡市内)蒲原宿

蒲原宿は、現在の静岡市清水区に存在した東海道15番目の宿場で、吉原宿まで11.2km、由比宿

まで3.9kmに位置していました。本陣1、脇本陣3、旅籠屋42、総戸数509の規模の宿場で、富士川の水運を利用し、山梨方面との米や塩の輸送基地として栄えていました。

<絵の説明>

歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 蒲原」には、海道のお茶屋を通り過ぎる旅人たちが。その後ろには富士が描かれています。その狂歌が「行き来する 人のいく度詠めても あしと思はぬ 富士はよし原 栄寿堂金信」記されています。

もう一つ、やはり歌川広重が描いた豎絵東海道「東海道五十三次名所図会 蒲原 不二河眺望」です。



5-1 狂歌入東海道由比 歌川広重

5 旧東海道六宿 由比宿

由比宿は、現在の静岡市清水区に存在した東海道16番目の宿場で、蒲原宿まで3.9km、興津宿まで9.2kmに位置していました。本陣1、脇本陣1、旅籠屋32、総戸数106の規模で、名勝薩埵峠の東にあり峠越えに備える宿場町であり、景勝の地ではあるが海と山に囲まれた狭い土地を利用しての製塩や漁業を営む農漁村でした。



6-1 狂歌入東海道興津 歌川広重 「興津川の川越風景」



6-2 隸書東海道「東海道五十三次 興津」歌川広重

6 旧東海道六宿 興津宿

興津宿は、江戸時代には東海道五十三次の17番目の宿場町として発展し、身延道との分岐の地点です。古代から交通の要衝として発達し、平安時代には清見ヶ関という関所が設けられていた。江戸時代における施設の数は、本陣2軒、脇本陣2軒、旅籠34軒です。2軒の本陣の内、東本陣は市川家が務め、西本陣は手塚家が務めました。また、脇本陣は水口屋が務め、明治以降は西園寺公望や伊藤博文など、日本の政治経済の大物たちが数多く宿泊したことで名高い。興津宿と由比宿の間には、東海道の三大難所の一つとして数えられる薩埵峠があり、峠から駿河湾越しに見える富士山の姿は絶景といわれています。

<絵の説明>

歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 興津」には、興津川の川越風景。「風ふけは花にこころを興津川 あさき瀬にたに 袖はぬれけり 年垣真春」と狂歌が挿入されています。

歌川広重の隸書東海道「東海道五十三次 興津」には、富士を望む清見潟に浮かぶ船。清見寺も見られ穏やかな風景が描かれています。



7-1 狂歌入東海道 江尻 歌川広重



7-2 三代歌川豊国(歌川国貞)が描いた東海道五十三次

7 旧東海道六宿 江尻宿

江尻宿は、本陣2、脇本陣3、旅籠屋50、総戸数1340の宿場町でした。東海道18番目の宿。巴川と清水湊の開運で発展しました。戦国時代は武田家臣穴山梅雪の城下町として発達し、慶長6年(1601)伝馬朱印を与えられ宿駅となりました。宿は駿河町奉行支配。伝馬役を主に負担した下町、仲町、魚町の三町を江尻街と言います。

<絵の説明>

歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 江尻」には、江尻宿西側から富士を仰ぐ絵が描かれています。その狂歌は「涼しさの かきりを吹くか 三保の松原 東京可好」。

三代歌川豊国(歌川国貞)が描いた「東海道五十三次之内 江尻 弥次良兵衛」。それには『東海道中膝栗毛』の登場人物、弥次さんと江尻弥次良兵衛が、背景には清水港が描かれています。



8-1 歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 府中」



8-2 『東海道名所図会』の「安倍川」、川越の様様

8 旧東海道六宿 府中宿

府中宿は、東海道19番目の宿で、本陣2、脇本陣2、旅籠屋43、総戸数3673の規模でした。駿河町奉行所支配所で、古代より政治、文化の中心地で駿河の国府＝駿府とも呼ばれました。今川氏が支配するようになってからは京文化も多く導入され、特に家康公の大御所時代には、国の内外から注目されていました。

<絵の説明>

歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 府中」には、府中宿の遊郭(二丁町)の賑わ

いが描かれています。その絵には、狂歌「青柳や 口の遠山 二丁町 東京禾旭」(口表記は判読不明文字)が添えられています。

『東海道名所図会』の「安倍川」には、川越の様子が描かれています。「川越制度」では、交通の要衝にある大河川に防衛の観点から敢えて橋を架けないで、人足や馬によって川を渡るようになっていました。渡し賃は基本的には川の水位によって決められていました。また川越の手段としては、徒歩・肩車・蓮台・馬越(土分以上)があり、それぞれの渡し賃が決められていました。



9-1 歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 鞠子」



9-2 三代歌川豊国(歌川国貞)が描いた「双筆五十三次 鞠子」

9 旧東海道六宿 丸子宿

丸子宿は江戸から20番目の宿場町で、本陣1 脇本陣2 旅籠屋24 総戸数211の規模でありました。駿府町奉行所支配で、江戸時代は鞠子と表示されていました。安倍川と宇津ノ谷峠の間であって街道の両側に家並みがありました。名物にはとろろ汁があり、十辺舎一九も『東海道中膝栗毛』に丸子のシーンでとろろ汁のことを書いています。松尾芭蕉も「梅若菜まりこの宿のとろろ汁」と句に詠んでいます。

丸子宿の西には宇津ノ谷峠があり、東海道の難所として知られています。古代から中世にかけては鳶の細道が峠越えとして使われていましたが、豊臣秀吉の小田原攻め以降、新たな峠越えの道が開発整備されました。

歌川広重が描いた狂歌入東海道「東海道五拾三次 鞠子」には、鞠子宿名物のとろろ汁の店で旅人や駕籠かきが腹ごしらえをする光景が描かれています。その絵には「旅は春 むかしなからの とろろ汁 東京禾旭」と狂歌が添えられています。

三代歌川豊国(歌川国貞)が描いた「双筆五十三次 鞠子」の名物十団子と雪景色の鞠子です。名物十団子とは、慶龍寺で八月の縁日に配られる厄除け用の十連の団子のことです。十個の団子は、旅の僧に姿を変えた地藏尊が、鬼を打ち砕いて十個の粒に変えて退治した伝説にちなんでいます。



10-1 東海道名所図会 (1)



10-2 十辺舎一丸が作成にかかわった掛け軸

10 八隅蘆菴(やすみろあん)の『旅行用心集』にみる江戸後期の旅

八隅蘆菴が『旅行用心集』を上梓したのは、文化7年(1810)6月のことです。次第に識字率も上がり、庶民の間にも文字言語が情報交換や文化文芸の手段として取り入れられるようになりました。その表れとしまして、庶民を中心に滑稽本や猥雑本が次第に普及していきました。そんな中で、十辺舎一丸の『東海道中膝栗毛』など旅道中などの読み物がベストセラーにもなり、その結果、伊勢参りにかこつた旅の流行が起こったと言えます。そこで、旅の注意喚起を促す『旅行用心集』が読まれるようになったようです。

『旅行用心集』(桜井正信の現代訳)の自序は次のように記しています。「人びとが仕事のいとまに伊勢参宮に旅立とうとして、道連れをさそい、いつが吉日だからその日にしよう決め、あちこちから選別物などももらい、家じゅうでその支度のあれこれに心うきうきとしているさまは、なんとも気持ちのひきしまるものである」として、旅立ちの期待と不安で浮足立つ日常がつづられています。今でも旅立ち前は落ち着かないものですが、江戸時代の旅は今以上の緊張感があったことが推測されます。

八隅蘆菴は「旅は言い表し難いほどである」とその感慨を語り、苦労やトラブルがつきものであるとして次のように記しています。「旅行中では風雨にあつこともあるし、都合で早朝から深い霧の中を山越えするとか、うすっぺらな夜具しかなかったとか、道連れや仲間とけんかになる、あるいは足を痛めた人が出て道がはかどらない、気候が変わったために持病が起きたなど、難儀なことが起こるものだ」と大変さを述べながら、「旅は若いものにとってよい修行になるというし、諺にも『可愛い子には旅をさせよ』というそだ」として旅の効用も説いています。

八隅蘆菴は旅について、「人情に通じ、思いやりの心を持つようになる」と期待しています。彼自身も旅が好きで、これから旅に出ようとする人の参考になればと『旅行用心集』はまとめられたと締めくくっています。

取材：静岡地区担当 生きがい特派員 早川和男